

滑稽俳句と川柳（三）

秋尾 敏

「俳句」という用語は江戸初期から使われていて、其角編『虚栗』の自序が初出かと思う。主に漢文中で俳諧を言い表すのに使われた言葉である。つまり、江戸時代の「俳句」は、「発句」だけを指すのではなく、俳文芸全体を指す言葉であり、川柳や滑稽発句もそこに含まれていたと考えた方がよい。

明治十年代になると岡野伊平が『滑稽風雅新聞』を刊行し、そこに「俳句欄」を設ける。それに続いて萩原乙彦や仮名垣魯文などが都々逸や狂歌などの滑稽文学を扱う雑誌や新聞を次々と刊行し、明治十年代には滑稽文学の大ブームが巻き起こる。

そこに俳句はあったが、川柳の後継者達は、このブームに乗り遅れてしまったらしい。明治前期には、川柳ではなく狂句のブームが巻き起こり、鶯亭金升などが人気選者としてもはやされた。

近代川柳が盛んになるのは、明治後期になってからのことである。正岡子規の短歌革新の影響を受けた阪井久良岐らが新しい川柳の潮流を作り出す。俳句の革新を進めていた正岡子規は、滑稽が俳句のすべてだとは言っていないが、俳句の本質に滑稽があることは認めており、子規一門は滑稽俳句の研究に熱心だった。佐藤紅緑編『滑稽俳句集』（内外出版協会・明34年）や寒川鼠骨編『古今滑稽俳句集』（大学館・明40年）が刊行されている。おそらくそれは月並調を逃れる一つの方法だったと考えられる。滑稽は型にはまった様式美や、精神の柔軟性を失った教訓調を離れ、読者の心を解きほぐすからである。

俳諧の滑稽をドイツ文学のフモール（英文学で言うところのユーモア）に結びつけ、滑稽文学の基礎理論をまとめたのも子規一門の中川四明である。一高教授でドイツ哲学を専門とし、関西俳壇の中心に立った四明は、フモールを滑稽に結びつけ「有情滑稽」という概念を作り出した。これはユーモアに近い概念と言え

るであろう。特定の他人や自分を差別的に笑うのではなく、人間存在としての可笑しさを共に笑うということである。四明は、諧謔は理に訴えるが、有情滑稽は情に訴えると言っている。

四明は、俳句に有情滑稽以外の笑いを認めなかったわけではない。ただ有情滑稽を至高の笑いと考えた。ここにおいて、日本文学の伝統的な概念であった滑稽は西洋文学の概念と結びつき、俳句が近代文学となる礎の一つが作られたと言っている。

一方、川柳は、他者を差別的に笑うことや、自分自身を自虐的に笑うことを軸に展開していったように思われる。むろん川柳にも時実新子のように、有情滑稽を軸とした作家はいるが、差別的な笑いを否定しないところに川柳の特質があるように思う。

今の時代、差別という概念はすべて否定されるべきもののように扱われているが、夏目漱石の『文学論』には、「文学とは差別である」と書かれている。それはそうであろう。敵と味方、正義と悪、分かっている人と分かっている人などを書き分けないことには物語は構想されないのである。

人間の認識の根幹は差別かも知れない。滑稽俳句と川柳の問題は、そこを突き詰めて考えていくためのよい素材ではないかと思われる。 (完)